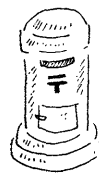


幼児教育第二世紀にむかって

鈴木とく



今、あらためて幼児教育第二世紀への志向を問われて、真面目に考えてみればみるほど、自分の過去の保育方法のあれこれが、砂上の楼閣のようにくずれてゆくような、たよりなき、もろさを感じます。

幼稚園創立から半世紀すぎた頃、私は、託児所の保育になり、主に東京の下町スラム街の子どもたちとすごし、二十九年に保母養成にまわされてからも、ずっと乳幼児の保育を考えて来たつもりでした。

ここで自分の今考えていることをのべてみることは、現在の幼児教育が、ほんとうに盛んなのかという、悲観的になってしまふ自分をもう一度、将来にむけて子どもの保育を考える姿勢にもどすことではないかと思ひ、お受けしたものの、難しさをどうすることもできません。勇気をおこして、二、三考えののべて、皆様から御批判や御教示を頂いて、勉強しようと気を取りなおした次第です。

要点をあげてみると、次のようなことです。

。自主性ある、考える保育者が育つこと。
。子どもの自主性を育てる保育を。

。第二世紀の児童福祉と教育の目的へのおもひ。

。自分が考え、して来た保育の実践の試みをねがう。(保育

方法について)

。乳幼児保育で最も大切にしていきたいこと。

以上のことについて、思いのままに書き進めることをお許し頂きます。

乳幼児の研究が進んで、諸学説が伝えられる度に、保母の気持ち持ちは、これでいいのかしらと、不安におのきまします。これは、日々、子どもたちの生活行動に目を奪われ、間近な保育だけを考えているからかもしれません。また、そのために、自分の保育方法を反省して、遠い将来に思いをはせる余裕がないからか

もしません。それとも、保育に期待をかけすぎることから、はつきり自分の保育効果の現われを言い得ない状態に、悲しみを覚えるからかもしれません。

いろいろ考えてみて、結局は、自分が、自主的に、自分の考えを検討することなく過ぎることが多いからと言えましょう。

保育の世界に、つぎつぎと花咲く保育方法にさそわれて、飛びつき、あまりうまくいかないと、また次の新しさを感じる方法に移ってしまうという繰り返しかえしを見たり、形式化した保育をそのまま受け入れて安住したりなど、自分もまた例外ではなかったと思います。現在の保育界は、何かを追い求めて急ぎすぎている、と見るのは、不当でしょうか。これは保育界だけではない現象だとしても、乳幼児の生活を守る存在としてはどうかしらと考えてしまうことが度々です。

保育観、保育方法の論議が盛んになることは、これからの保育の発展の為に大切なことです。しかし現場が、それにつられて急ぎ足になるのを感じて、乳幼児保育に悲観的になることがあります。果たして、幼児集団保育は、人間のパーソナリティー形成の基盤になるのだろうか、不審を抱いてしまうこともあります。また、「人間はとこまで動物」、「どこまで動物か」という仮説のものとの議論をするとききますと、生物学

その他の理論にうとい私は、言いようのない不安を、将来の保育に感じてしまいます。人間不信を育てるような、様々な研究が、この後次つぎ出されたら、私たち保育者は一体どうしたらいいのかしらなどと、余計なことかもしれません。心配になります。

こうして考えますと、ゆれ動く保育者ではなく、自主性を持った保育者が、これからどんどん増して、きびしい自己研修を通してプロの精神を培ってほしいと願います。

また、そうした保育者と、家庭の人、特に両親とが相互理解と協力につとめ、乳幼児時代に、じっくり何を育てることが大切なのかを了解し合って、ゆったりと保育するようにしたいものです。

保育者たちと両親たちと共に、児童福祉法第一条が、地域のみんなにしみとおることに努力できたらと思います。

「すべて児童は、ひとしく、その生活を保障され、愛護されなければならぬ」

今は、その「ひとしく」にむけて、幼稚園や保育所の先生たちは、どう思いをはせておられるのかしら、と考えてしまいます。

これとともに、教育を受けたい人は誰もがそのチャンスを得られるように、と考えますと、保育所も幼稚園もまだまだ不足しており、保育所からも幼稚園からも受け入れられない子どもが沢山いることが、この第二世紀に解消されたいと思いますし、あわせてマンモスから幼児の生活に適した集団になるよう、大人社会が真剣に考える方向へ進める必要を感じます。

保育者が自主性を持つことは、学者、実践家のユニークな保育方法論を自分の選択でうけとめ、考えるようになることです。

その人は、きっと、教育基本法前文や第一条教育の目的を、じっくりとかみしめくだけ、自分の考えの中に入れて、幼児にあったその実践方法を考え、実施し、反省し、たしかなものにしていくにちがいません。

特にその中で私が思うことは、個人の尊厳を重んじる、個人の価値をたつとぶということの日常保育態度が、保育者から自然にじみ出るようにしたいことです。自主的精神に充ちた、勤労と責任を重んずる社会の形成者として育てたい意欲を、持ち続ける保育者であってほしいと思います。

長い間保育所の実践で、私が子どもたちの将来に描いたの

は、基本法などまだ作成されない頃から思っていたのは、この基本法の先へのべた所でした。

意欲的に働く勤労者、考えて生産に従事する人、学歴や富に對して卑下することなく自分の考えを主張できる勤労者、そして集団に對して盲従することなく、他集団を拒否することなく、リーダーシップを発揮する勤労者として育ててみたいと思つたのです。以上を支えるものは、かわいがられたという思いではないかと思ひ、それはまた、他を思いやる情に転ずるのではないかしらと考えました。

これを保育方法でどのようにしたらよいかと、保育者集団で考え合い意見を出し合つた結果が、年齢縦割保育でした。保育の組分けを、発達状況を同じくする暦年齢を基準とし、べつに、日常生活や時には遊びの生活で縦関係による種々な経験を通して、子ども同士まなびあうことを願つて、地区別グループを組織したのでした。戦時中も、戦後も、三十年代にも、この考えの組分けをとり入れた保育をしたのですが、記録報告するように日誌を書かなかつたことは、くやまれることです。

ひとつの組織の型にしてしまわなかつたことは、大人も子どももオープンになることのよさを感じたと思われまふ。そこでは、過去の保育五項目や、いまの保育六領域を教えこむ保育は

主体とならず、子どもたちのグループへのかかわりあいや、自分で遊びの選択、集中、などをとおして生活行動が見守られたといえるかもしれません。

親も自己本位になりつつある現代の社会状況の中を思うと、こうした勤労者として育つ子どもの保育に、この方法を考えてみて頂きたいなど、希望的に、おそろおそろ提言します。

知的教育は、勤労する人を育てることに、とても大切だと私は考えました。しかし、こちらからあれもこれもと知識をつめこむことに抵抗を感じ、子どもから求めることに苦心したいと思っていました。

倉橋惣三先生の『幼稚園真諦』の中の、「子どもがさながらで生き動いているところの生活をそのままにしておいて、教育の目的を、そこへもちかけていきたい」を読んで、こういう保育をしたいなあと思いました。今考えて見ますと、勤労者集団の中で生き、「ひとりば集團のために、集團はひとりのために」を真剣に考えていながら、一方で、個を大切に生かしたいと考えたのは、矛盾してはいはないかと思えます。しかし今もこのままです。第二世紀の幼児保育の実践家に、この融合がどこでな

されるのか、保育実践して頂きたいとお願ひしたくなります。

いろいろとこれからの保育に思うことを書きつらねて来ましたが、乳幼児保育では一体何がその子どもにのこるのだろうかということについて、すっきりひとつと言われたら、何と答えようかと、この頃、とみに思います。私は、ほんとうに可愛がってもらったという満たされた感情を育てることではないかと、思います。というのは、大人になっていく大切な時期は、中学、高校時代の教育ではないかと、保育学生に接して思うことがしきりなので、ではそこへいく前の前の時代には？ と、自分に問いつめてみました。

してやりたいこと、させたいこと沢山ありますが、自主性が育つためには、自発的行動がゆるされる広がりや時間が必要です。行動がゆるされ（安全に見守られて）時間を待ってもらうことは、その子どもが本当に愛されていることなのだと思います。

管理社会、競争社会が、人間らしく管理されたりしたり、社会をよくするための競争が行なわれるようになるために、自主性と愛の感情を育てる保育の実践を工夫する世紀でありたいと思います。
(練馬高等保母学院)